

長崎唐人屋敷の遺構調査と敷地の復元

長崎大学大学院 学生員 ○前川裕之
 長崎大学工学部 非会員 角 良太
 長崎大学工学部 フェロー 岡林隆敏

1. はじめに

長崎唐人屋敷は、長崎市のみならず我が国における貴重な史跡であり、歴史的にも観光の面からも重要な位置を占める場所である。しかし、唐人屋敷がその役割を終えて以降、現在に至るまで歴史的意義の顕在化に対する具体的な施策がされていない。また、今まで多くの調査・研究がなされているが、それらの多くは唐人屋敷の規模やその機能に関する商業史の分野からのもの、すなわち貿易をひとつの軸とした研究、もしくは在長崎唐人たちの生活・風俗面からの考察などである。さらに、正確な内部構造や敷地の範囲が明確にされていないために、文献等の量ははるかに少なく不明な点が多い。そこで本研究では、今後の長崎唐人屋敷の整備活用のために内部構造の遺構調査を行い、範囲の確定と敷地の立ち構造の復元を行った。

2. 長崎唐人屋敷の遺構調査^{1) 2)}

(1) 調査目的

長崎は、鎖国時代唯一の外国との窓口として中国・南蛮貿易が行われていた。そこにはオランダ人居留地である出島と共に、中国人の居留地として唐人屋敷が設けられた。それが長崎唐人屋敷の形成である。町の開発等が行われている現在も、当時の道路路線や石垣、石段、空堀・水堀はまだ多数残っており、市内に現存する史跡の中でも象徴的なものであるといえる。従って、出島の整備と同等の評価をして保存・活用する必要がある。しかし現在、唐人屋敷の内部構造や敷地範囲が正確に把握されていない。そこで、長崎唐人屋敷の今後の整備活用のために内部構造の遺構調査を行った。

(2) 調査対象

調査対象は、歴史的建築物、石垣、石段、道路路線、水堀・空堀、敷地である。唐人屋敷形成当時から残っている歴史的建築物は、「土神堂」、「天后堂」、「観音堂」の3御堂であり、これらの施設は、唐人屋敷地内の構成に重要な位置を占めている。また、3御堂は、江戸時代からの位置関係の変化が殆ど無いため、当時の地図と現在の地図との比較対照に利用することができ、範囲の確定をする上で非常に大きな役割を果たしている。

現在は、3御堂に福建会館を加えた4つの代表的な歴史的建築物が存在する。石垣は、唐人屋敷内の敷地割りに用いられていたうえ、積み方で年代を視覚的に推定することが可能であるため、遺構調査において石垣の調査・特定は特に重要である。現存している石垣は、町の開発等で若干の場所のずれが生じているものも含め12カ所である。図-1に、現存する石垣を古地図(長崎諸官公衛図)と現在の地図に記載した図を示す。番号は、それぞれ対応した石垣を示している。石段は、石垣と同様に石段のあるところで敷地が変化しており、唐人屋敷の範囲を把握するうえで重要な遺構である。石段は、整備補修され、現存している石段は4カ所である。道路路線においては、町の開発等で整備されている道路を含めると12カ所現存している。水堀・空堀においては、当時の水堀が西側に1カ所、空堀は、空堀跡の一部として南東の端に1カ所、南側に1カ所の計3カ所現存している。この水堀・空堀の遺構は、範囲の確定に重要な役割を果たす。敷地は、当時の状態と比べ、変化があるところと無いところが存在する。敷地調査

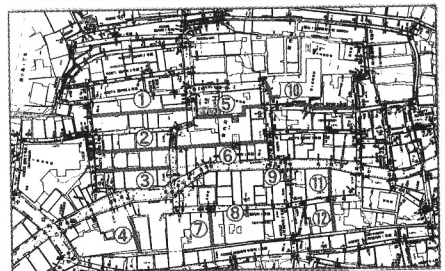
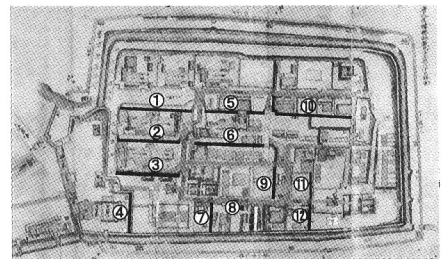


図-1 現存する石垣の位置

の結果は、後に示す唐人屋敷形成当時の敷地復元図の作成に重要になってくる。

3. 長崎唐人屋敷の範囲確定

長崎唐人屋敷の遺構調査を元に、範囲の確定を行った。範囲の確定方法の第1は、Photoshop6.0 (Adobe Systems 社製) を用いて現在の地図と当時の古地図を照合し、重ねて範囲の確定を行った。照合したポイントは、西側の水堀、南側の空堀跡、北東部の崖、北西部の角の計4点とした。図-2にこの照合方法を用いた図を示す。図-2は現在の地図と長崎外国人居留地図を重ねた図である。第2は、ArcInfo・ArcViewGIS (米国 ESRI 社製) を用いて、遺構調査をもとに現在の地図と当時の古地図の内部構造における照合を行い、重ねて範囲の確定を行った。照合したポイントは、現存する石垣7カ所、3御堂の計10カ所である。図-3にこの照合方法を用いた図を示す。図-3は現在の地図と長崎諸官公衛図を重ねた図である。これにより、唐人屋敷の範囲の確定がなされた。

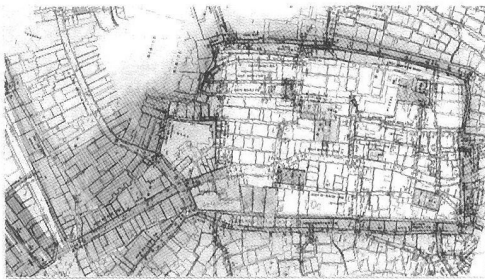


図-2 長崎外国人居留地図との重ね合わせ図

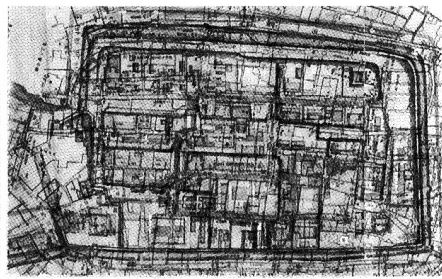


図-3 長崎諸官公衛図との重ね合わせ図

4. 長崎唐人屋敷の敷地の復元

長崎唐人屋敷の遺構調査、範囲の確定を元に敷地の復元を行った。範囲の確定により、唐人屋敷が存在したとされる範囲内の321カ所の測量を行い、ArcView GIS・3D Analyst (米国 ESRI 社製) を用いて敷地復元図を作成した。図-4に現在の敷地復元図を、図-5に当時の長崎唐人屋敷の敷地復元図をそれぞれ示す。当時の敷地作成にあたり、敷地の高さは資料に存在しないため、敷地の調査の際に当時と変化が見られないとされるポイントと古地図と現在の敷地復元図とを比較し作成した。図-6は当時の古地図との合成敷地図である。現在と当時の敷地復元図を比較してみると、現在の敷地の奥 (図-4の右上付近) は、多少変化が見られるものの、基本的にはほぼ唐人屋敷形成当時と敷地が変化していないことが分かる。

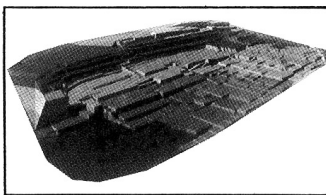


図-4 現在の敷地復元図

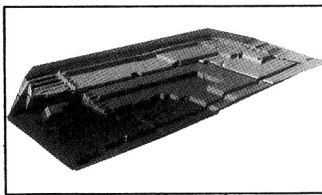


図-5 当時の唐人屋敷の敷地復元図

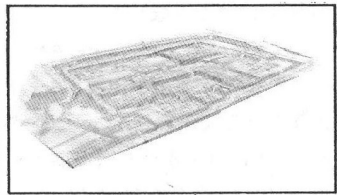


図-6 当時の古地図との合成敷地図

5. まとめ

本研究では、今まで正確に把握されていなかった長崎唐人屋敷の内部構造の遺構調査を行い、唐人屋敷の範囲の確定、敷地の立ち構造の復元を行った。研究の成果を要約すると次のようになる。(1) 長崎唐人屋敷の内部構造の遺構調査を行い、唐人屋敷の範囲の確定をすることで、今まで不確定であった大門、東側の空堀、北東部の崖の位置がそれぞれ確定された。(2) 当時の唐人屋敷の敷地の復元により、現在の敷地に当時の唐人屋敷の敷地を復元することが可能であることが分かった。これにより、今後の唐人屋敷の整備活用を行っていくうえで有効なものとなった。また、当時の遺構が多数残っており、調査結果を元に観光への活用も可能となってくる。

【参考文献】1) 李 陽浩, 永井規男: 元禄年間における長崎唐人屋敷の構成について, 日本建築学会計画系論文集 第482号, pp.175~184, 1996.4 2) 北垣聰一郎: 館内33町区遺跡依存状況調査にかかる所見, 1995.4